

発信メディア媒体としての「建築」とメッセージ性

慶應義塾図書館建築に見る歴史的学問の変遷

平成 26 年 1 月 19 日
総合政策学部 4 年
坂井周史
71003457
藁谷郁美研究室所属

目次：

1. 本研究の目的と仮説.....	p.3
2. 手法	p.3
3. 本論	p.4
3-1. 図書館建設の目的の違い	p.4
3-2. 制度・設備の違い	p.8
3-2-1. 開架制を取ることによる影響	p.8
3-2-2. コンピュータ等機械設備を備えることによる影響	p.9
3-3. 建築様式の歴史的経緯の違い	p.10
3-4. 構造・意匠の違い	p.13
4. 結論	p.17
5. 参考文献	p.18
6. 図表リスト	p.20

1. 本研究の目的と仮説

本研究は、発信メディア媒体としての「建築」の重要性を研究視点とするものである。建築物は人間の活動の「空間・場」としての機能を果たすだけでなく、その様式・外観・内部構造に至るデザインすべてが、思想を発信するメディア媒体として機能しているのではないだろうか。時代の変遷と共にみられる時代的背景・思想・社会的変化の現れが、建造物のあり方に反映されているのではないか、この点を探求することを本研究の目的とする。具体的には、学校法人慶應義塾の所蔵する建築物、「図書館」を事例対象として調査・分析をおこなう。慶應義塾には、図書館旧館（以下、旧館と記す）と呼ばれる最も古い図書館としての建造物、慶應義塾図書館新館（以下、新館と記す）と呼ばれる時代的に比較的新しく図書館として建造された建物が、同じ敷地内に共存する。同一空間のなかに時系列的には異なる時代に作成された建築作品を比較検討することで、それぞれの担った（あるいは現在も担っている）メッセージ性とは何か、その変遷を調査・分析対象とする。特に明治維新以降、日本の学問が近代化を伴い大きな変遷をみせるその時代背景との関連性は、図書館という建築物に集約した形で現れているのではないかと考える。旧館が開館した1912年から新館が開館する1982年まで七十年間の時間の経過が存在する。その中で、旧新両図書館の移行時期と日本における学問に対する捉え方の違いがあらわれているのかどうか、どのような要素が違いとして浮上するのか、本研究ではその点を中心に探求する。

図書館とは学問を行なう場であり、建築のデザインや機能はその建築物の中で行われる活動に影響を受けたものとなる。それならば、旧館と新館ではデザインにも機能にも違いがあることは想像に難くないが、その違いは旧館開館の時代と新館開館の時代における学問の概念の違いから現れているのではないだろうか。

また学問のあり方に関する違い以外に両館の違いに影響を与えている要素もあるのではないかと考える。例えば、高度な情報通信技術の発達により、技術的により便利なサービスを提供できるようになり、旧館にはなかった機能が新館には搭載されている、という例が散見できるのではないかと考える。人間の生活環境がめまぐるしく変化する中、学習環境の変化も当然のことながら並行してみられる。その変化そのものが、図書館建築にも変化の要素としてみられるのではないかと考える。この視点も含めたうえで、検討していきたい。

2. 手法

本研究において対象とする旧館と新館を①図書館建設の目的の違い、②制度・設備の違い、③建築様式の歴史的経緯の違い、④構造・意匠の違い、の4つの視点から比較・分析を行なう。①から③については文献資料を調査・分析することによって比較・分析し、④

の点については、図面資料をデータとして扱い、両者の比較を行なう。

3. 本論

3-1. 図書館建設の目的の違い

慶應義塾図書館旧館は1912年に創立五十年記念事業の一貫として開館された。それまでは独立の図書館という建物はなく、会議室、大広間のある建物の一階・二階を指して図書館と呼ばれていた。しかし創立五十年に際して、直前に専門学校令が公布されそれに基づいて認められる大学となったことで独立の図書館を建設する必要性が認められた。当時の図書館の監督（現在でいうところの館長に当たる）の田中一貞(注1)は1906年3月に行われた第一回全国図書館大会(注2)での「図書館建築についての注意」と題する講演の中で、図書館建築で最も留意すべきこととして、米国のシカゴ図書館長W・Fプール氏(注3)の説を基本とし、防火・経済・将来への拡張計画の三つを挙げた。同年12月に発表された130名の連名による図書館の建設趣意書に図書館急用の理由が記されている。以下斜字部を引用文とする。

「目下最も必要を感じずるものは図書館の設備是なり。図書館は大学教育上に欠く可からざる設備にして、欧米諸国の大学を見るに何れも宏大なる図書館の設あらざるなし。

(中略) 盖し大学専門の教育に教場の講義と共に図書館の研究に重きを置くは欧米一般の趨勢にして、其国々の大学が図書館を以て設備の一大要件と為す所以なれども、我国の如き公私図書館の数少なくして一般閲覧者の希望を充す能はざる国に於ては、大学の図書館を単に学生の研究場たらしむるに止めず、之を公開して世間の公益に資するの必要あるを信ず(義塾図書館の現状を述ぶ箇所は略す) 図書館の設備欺くの如く不完全なるは実に教育上の一大欠点にして現在の設備中最も図書館の必要を感じずる所以なり、即ち創立五十年の記念としては図書館の建設を適當の方法と信ずるを以て広く有志者の賛助を得て、金参拾万円を募集し、本塾構内の適宜なる地を相し、一大図書館を新築して、慶應義塾創立五十年記念図書館と名づけ、義塾学生の研究に資すると共に、世間一般の閲覧者に公開することと為し、建築費を支払ってなお余財あるときは之を図書購入基金に充てんとするの計画なり。(後略)」(注4)

注1 慶應義塾図書館初代館長。『慶應義塾図書館史』55頁

注2 全国の図書館関係者が集まる会。日本図書館協会 公式ホームページ (最終閲覧日:2014/01/18) (<http://www.jla.or.jp/jla/tabid/221/Default.aspx>)

注3 William Frederick Poole. Chicago Public Library 公式ホームページ (最終閲覧日:2014/01/18) (<http://www.chipublib.org/aboutcpl/history/index.php>)

注 4 『慶應義塾図書館史』70,71 頁

以上の図書館の建設趣意書より、旧館は当時図書館建築が進んでいた西欧を模範として建設が求められたということが分かる。しかし単純に西欧の図書館を模倣するわけではなく、欧米では市立図書館が充実しているのに対し日本ではまだ世間に図書館が不足しているという違いを考慮して、より日本において意義のある図書館を目指していることが分かる。

対して、新館の方は蔵書が増えて図書館の増設の必要があったということもあるが、ただの旧館の増・改築に留めることはなかった。1959年に発足した新図書館建設委員会にてその具体的な草案が作成された。

その要旨は、新図書館は今の図書館の増・改築にあるのではなく、新しく建てられるもので、その際、今迄の図書館は新図書館と関連して機能を発揮させるよう考える。新図書館は従来、ややともすれば研究・調査及び教育機能に効果的に結びつかない点があったのを是正し、一施設内において両機能が有効的に発揮されうるよう考える。蔵書数は将来二十五年を見越して二百万冊、利用対象数は教員千、学生一万五千、敷地は八五〇坪、該当敷地内に約六千延坪の建設が可能であるとして、

A 研究のための施設（個人研究室、大学院研究室、共同研究室、資料室、会議室、教員室）
所要坪数二、一〇〇坪

B 学習読書のための施設 座席敷 一、五〇〇席

C 資料の管理・保存・利用のための施設（管理部門、受入整理部門、奉仕部門、特殊資料部門、特殊コレクション部門） 所要坪数 三、三〇〇坪

D 図書館学研究室（図書館学科・ライブラリーセンター） 所要坪数 四六〇坪

（後略）（注5）

注 5 『慶應義塾図書館史』245,246 頁

結局のところ、この計画はわずか一ヶ月の短期的な計画であったために、米国図書館協会 (ALA) の国際部長ダルトン(注6)から、図書館の建設には調査、考察等少なくとも十年の歳月を要する、と諭されたことから潰えた。しかしこの計画から旧館の弱点を補う形での新館建設を行おうとしたことが分かる。そしてこの計画が萌芽となり、新館の前身にあたる1970年の研究・教育情報センター構想(注7)へと発展することになる。

従来の図書館に加え、当時新しく竣工した研究室の図書寄りの部分に研究・教育情報センターを設置することで図書館が効率的に研究に作用することができた。他にも、利用者サービスの向上のために入館証を廃止し、学生証の提示のみで入館できるようにしたことや図書館の開架制（閲覧者が自由に書庫に入り、本を手にとって見られる制度）の拡充などが行われた。

しかし後には現状さらには将来の蔵書の増加に備えるのに加え、雑誌の配架も行えるように新館を開館する運びとなった。『開館100年記念 慶應義塾図書館史稿 1970-2012』によると、

その背景には、新築部分には情報センターの施設をまとめ、収容する研究施設は共同利用施設に限るなどの考え方があった。(注8)

また、情報センター発足から六年を経過し、新たな基本方策や課題を検討する必要に迫られ開催された政策運営研修会(注9)では、研究・教育情報センターの第二期を考えるための議論がなされた。

注6 Jack Dalton. The New York Times 記事 (最終閲覧日:2014/01/18)

(<http://www.nytimes.com/2000/07/16/nyregion/jack-dalton-92-authority-in-library-studies.html>)

注7 図書館・研究室・研究所等ではばらばらに管理されていた図書資料を一元的に管理・提供することにより、より高度のサービスを目指した計画。『開館100年記念 慶應義塾図書館史稿 1970-2012』16頁

注8 『開館100年記念 慶應義塾図書館史稿 1970-2012』45頁

注9 三田情報センターの建設時代から発展時代へと志向するため開催された研修会。

1976年7月から1977年3月まで六回開催された。『開館100年記念 慶應義塾図書館史稿

1970-2012』 45 頁

①蔵書の発展にかかわる諸問題、②施設の整備・拡充にかかわる諸問題、③サービスの拡充の問題、④人的資源の拡充と発展にかかわる諸問題、⑤研修の問題、⑥センター経営と管理の将来の課題のテーマの下問題点が洗い出された。

(中略)

また、研究室と図書館の併合を目的とした三田情報センター構想であったが、併合は運営の組織とスタッフの意識のなかでは実現できたが、施設、蔵書構成、ビブリオグラフィック・コントロールでは分立しているという大きな問題も提示された。

(中略)

発展を志向しながらも、この時期書架の増設も着々と進められ、一九七六年度内に、約五万冊分の書架が新たに増えた。

(中略)

一九七七年五月、新図書館・研究室棟（三田）建設調査委員会が新たに答申書を塾長宛に提出した。現研究室棟の北側部分に総面積五、〇〇〇坪程度、百万冊の図書を収容し、一、〇〇〇席の閲覧室を確保できる情報センターの施設と、四学部及び大学院研究科が必要とする共同利用施設を収容する建物を建設したいとの内容であった。(注10)

新たにこの時期五万冊分の書架が新たに増えたことも手伝い、新館の建設が求められるようになった。最終的には新館は独立の図書館棟として建設された。

旧館は当時図書館建築が進んでいた西欧諸国を手本としていることがわかる。しかしながら、西欧では公私図書館が充実しているのに対し、日本ではまだ国内に図書館の数が充実していなかったことから、塾生のみならず世間一般の人々に対しても有益になるよう広く開けるという方針を掲げていることから、より日本に合った形の図書館を作ろうとしたことが分かる。

対して新館は、研究室と図書館の併合を試みた情報センター時代の反省を受けて作られた。そもそも研究室と図書館の併合を目的とした情報センター構想であったが、施設、蔵書構成、書籍分類の面から問題が生じたために独立の図書館棟を建てることで、情報センター時代の問題を解決すること、また今後増える蔵書を所蔵することを目的としている。

注 10 『開館 100 年記念 慶應義塾図書館史稿 1970-2012』 45 頁

3-2. 制度・設備の違い

3-2-1. 開架制を取ることによる影響

日本で図書館が開架制(注 11)を取り入れられ始めるのは 1960 年頃で、1912 年に建てられた旧館は多くの書庫が従来の閉架制(注 12) (資料のほとんどを書庫の中に置いて、利用者が希望の本を職員に依頼して書庫の中から出してもらう方式) を取ることを前提とした構造になっていた。対して新館は現在ほとんどの図書館で取っている開架制が一般的になってから建設されたものなので、最初から開架制に合わせた構造になっている。慶應義塾図書館が大規模な開架制導入を進める方針であったことは新館を建てる大きな理由の一つになったであろう。

以下で開架制と閉架制で建築が異なる構造となる理由について述べる。

(前略)「建築計画学」では開架にした場合の規模について以下のように記述している。「開架式が、閲覧者にとっては手軽に本が借りられて親しみやすく、職員のデスクワークも少なくすむシステムであることは、これまで考察してきたとおりである。しかし、次のような理由で、全ての本を開架にすることは困難であり、また不適當であると考えられている。

a 開架式では、閲覧者が書庫にはいるから、見通しのよくない書庫は、盗難、抜取り等の事故を起こしやすく、少なくとも公共図書館ではこの原則は重要とされている。

b 開架書庫は閉架書庫に比べて広い面積を要し、あまり多くの本を開架にしておくことは経済的に不利である。

c 開架式書庫にはよく利用される本だけを纏めておいた方が、多くの閲覧者にとって本が探しやすく便利である。利用率のきわめて低い、古ぼけた本がたくさん並んでいると、読みたい本がかえって探しにくくなるばかりでなく、図書館自体が古ぼけた感じになり、閲覧者が図書館にたいして魅力を失う結果になるともいわれている。利用率の低い本が一緒になっていることによって利益を得る人は、閲覧者のごく一部にすぎない。」(7章1)

このことは、「建築計画学」の著者と同じメンバーによって書かれた「建築計画ノート」(彰国社、1960年)にも引き継がれ、<5. 規模との関係>の項で「実例から判断すると、自由開架式で 10,000 冊、安全開架式で 15,000 冊ぐらいが書庫の大きさの限度と見てよいであろう。」(P31) と記されている。(中略)

注 11 自由開架方式。現在の開架方式のことであるが、当時は「利用者が自由に書庫に入る」という言い方がなされていた。『図書館建築発展史』24 頁参照。

注 12 資料のほとんどを書庫の中に置いて、利用者が希望の本を目録カードで選んだ上で、

職員に依頼して書庫の中から出してもらう方式である。『図書館建築発展史』25頁参照。

これらの記述も当時の図書館界の考え方を代弁していると見ることができるが、明らかに現在の考え方とは違っている。それは初めに記したように本の管理を厳密に求められていたことに起因する。現在は公共図書館で一般の本は消耗品扱いになっているか、あるいは図書館長の裁量で破棄処分もできる（高価本は別の例もある）ところが多いが、当時は全て備品扱いであったために、一冊の紛失もないように館長の責任で管理を求められていた。(注13)

開架制を取ることにより、従来よりも蔵書一冊当りの必要面積が広がることは、当時の新館建設の必要を加速させたのではないだろうか。そして旧館が地下二階から四階の上の屋根裏までの計七階層であるのに対し、新館が地下五階から七階までの計十二階層にまで及ぶ理由にもなるであろう。

3-2-2. コンピュータ等機械設備を備えることによる影響

(前略) 図書館サービスネットワークが構成されれば、ネットワーク加盟図書館では個々に保存書庫を持つ必要がなくなり、建築的には軽やかで明るく開放的なものにできるし、多くの図書館での深刻な悩みとなっている資料が書庫に入りきれないという問題は解消される。書庫の増築は集中保存庫を担当する図書館だけで考えればよいのである。(注14)

コンピュータ等機械設備を備えることで、全国の大学図書館の所蔵状況確認もできるようになり、資料の検索や取り寄せなどがユーザー自身で行えるようになることで、建築には施設を軽やかで明るく開放的なものにできるという影響がある。このことも旧館と新館の建築の差異に影響を及ぼしているだろう。旧館は建物の様式が窓面が小さいゴシック式であるのに対し、新館は地階以外の階層は基本的に外面の多くが窓に覆われている。

注13 『図書館建築発展史』26,27頁

注 14 『図書館建築発展史』 205 頁

3-3. 建築様式の歴史的経緯の違い

旧館の建築様式決定に際しては、慶應義塾側の要請ではなく旧館の設計を手掛けた曾禰・中條事務所(注 15)に依る所が大きかった。

「図書館をゴシック・スタイルにしたのは、別に先方の注文に依ったという訳では無いが、スケッチ、デザインとして十二三種先方に差出したが、最後に何か変わったものとの依頼にて此案を出したら決定になったのである」(建築雑誌二九九) 図書館の様式については学校側に注文はなく、事務所側でゴシック・スタイルは真面目な建築に向いているところから、採用しようとしたもので、ただその選択に学校側は迷ったらしい。「何か変わったもの」という希望がでたのは、基金に予猶があったからと、五十年記念だから荘麗なものを造りたいということからであろうか。この最後案の設計は曾根でなく中条であった由である。ゴシックとはいうものの、中期の「稍デコレレーテッド・スタイル、即ち華麗式に則ったもの」に決定したのであった。(注 16)

先に、様式を選択に当り基準は日本の建築家の側にあった、と書いたが、では、様式の文化的意味が分からない状態でいったい何を判断の基準としたのだろうか。彼らにも教えられれば分かることが二つあった。一つは、用途と様式の関係で、たとえば大学は中世の修道院がルーツだから中世のゴシックがふさわしいとか、宮殿はフランスが本場だからフランス様式にするとか、いくつかの用途についてはお定りの様式があり、それを約束ごととして覚えることは可能だった。(注 17)

以上より、旧館がゴシック式で建築された理由とは、ゴシック様式が防火性に優れた建築様式であること、歴史的に大学の建築の様式としてゴシック式が選択されてきたという経緯があることが大きい。実際に、慶應義塾図書館旧館と近い時期に建設された大学施設は、早稲田大学大隈講堂を始めほとんどがゴシック式となっている。

注 15 曾禰達蔵と中條精一郎による設計事務所。民間の仕事を中心に幾多の名作を残している。『日本の近代建築(上)』 223 頁参照

注 16 『慶應義塾図書館史』 75 頁

注 17 『日本の近代建築（上）―幕末・明治篇』 263 頁

しかし、結果的に旧館はゴシック様式で設計されたものの、当時の日本における建築の様式とはヨーロッパにおける建築の様式と比べると異なる部分もあった。

ヨーロッパの様式は、日本に比べ強力で、これが独得の党派性を生む。（中略）ヨーロッパの様式の強靱さは時間をも凌ぐ。ギリシア、ローマの古典様式は、長い中世で忘れられた後、一四、五世紀のルネッサンス時代に再生しているし、十九世紀に入るとそれ以前のすべてのスタイルが登場する。こうした様式の再生能力は日本の“〇〇造り”には欠けており、一度忘れられた様式が何百年か後に復活したためしは例外的にしかない。日本は用途への従属が基本で、古代の神明造りも春日造りも神社が続くかぎり持続できるが、一方、近世の城郭作りは明治になって用途が終えると消える。ヨーロッパの建築は様式を基礎とし、日本の建築は用途を土台として建つ。（注 18）

明治二十年代のこととして伊東忠太が面白い回想を残している。日本の建築の将来についての討論会の席上、「或る人は……ゴシックでなければならぬと言ひ、或る人はルネーサンスがよろしいと互に議論を闘はし、最後に……議長さんは、採決をします、ルネーサンスに賛成の人は手を挙げなさいと言った。……ゴシックの方よりも挙げた手の数が多かった。茲に於て日本将来の建築はルネーサンスであるということに決議されたのでした」。様式というものへのこんな軽い接し方は、ヨーロッパには無い。（注 19）

古来より様式ではなく用途を土台とした建築を行なっていた日本では、ヨーロッパにおける建築と比較すると様式に対するこだわりがなかったことが分かる。

ヨーロッパにおいて大学自体のルーツが中世の修道院であるという歴史的な経緯により、日本でも大学のデザインをゴシック式にするということからは、当時の日本において大学というものが西洋から新しく入ってきたばかりの概念であることが伺える。大学で行われる学問も同様、西洋から輸入されたばかりの概念でまだ日本に馴染みきっていなかったのではないか。

注 18 『日本の近代建築（上）―幕末・明治篇』 211, 212 頁

注 19 『日本の近代建築（上）—幕末・明治篇』 262, 263 頁

対して、新館開館の時代には既に日本を含んだ世界において建築で歴史的様式が使われなくなり、モダンデザインが台頭した理由については以下のように述べられていた。

四〇年間の化学反応の過程を改めて観察すると、順を踏んで変化は進行していることが分かる。まず、世紀末にアールヌーヴォーという植物にインスピレーションを得たデザインが口火を切り、続いて一〇年代にキュビズムや初期の表現派の鉱物結晶化が起き、二〇年代に入ると、デ・ステイル、ピューリスム、バウハウスなどの白と直角の幾何学の段階に達し、さらにミースの数式のような抽象性にいたる。

植物→鉱物→幾何学→数式

と、変化はしだいに層を深めているのである。

(中略)

いったい、なぜこのようなそれまでの歴史にはない展開を二〇世紀初頭の建築家たちはやってしまったのだろうか。

おそらくこうなのだ。一八世紀後半、産業革命によって科学と技術の時代の口火が切られ、歴史と文化に依拠する歴史主義の空洞化が始まる。空洞化を肌で感じた一九世紀の建築家たちは、なんとか内実を回復しようと、忘れられていたゴシック、ギリシアといった過去のリヴァイヴァルに努め、また東方をはじめ異国のスタイルを手当たりしだいに取り込んだ。様式のおもちゃ箱をひっくりかえしたような一九世紀の状況はこうして生れた。しかし結局どこにも空洞化を埋めるネタは見つからなかった。そして世紀末、ついに行き詰った建築家たちは、過去や異国といった外に救いを求めることをやめ、自分の内側を見つめはじめ、人間の感受性そのものの中を掘りはじめた。そして最初に見えたのが植物的な感覚の層で、以下、自然界をたどるように、鉱物感覚の層、数学感覚の層、と掘り進んで底を打った。アールヌーヴォーにはじまりミースに終わったのは、おそらくそういうことだった。(注 20)

注 20 『日本の近代建築（下）—大正・昭和篇』163, 164 頁

世界的に建築で歴史的様式が使われなくなった経緯については筆者の藤森氏の推測が多分に含まれているが、確かに戦後にはほとんど使われなくなった。そして、

近代という科学技術の時代にふさわしい合理的で機能的な建築表現(注 21)

である、モダンデザインが台頭することになる。新館、さらには湘南藤沢キャンパス設計者の槇文彦氏もモダニズム(注 22)の建築家とされている(注 23)ため、モダンデザインの流れは少なくとも湘南藤沢キャンパスが開設される 1990 年までは続いているといえるだろう。

3-4. 構造・意匠の違い

新館が建てられた 1982 年は既に日本にも図書館建築が数多く設計された後の時代である。

情報センターは設計者に提示するため、「閲覧・利用機能、書庫機能、事務機能」について具体的な施設名を挙げ、収容人数や冊数、必要面積、必要施設の目的・内容を具体的に既述した文書を作成し、特に留意して欲しい事柄のリストと共に、設計者側に渡した。以後、緊密な連携のもとに基本設計を勧め、一〇月の建設委員会（仮称）に設計者による第一次案（基本設計）が提出された。しかし、その後、新館の階数を一つ増やして、欺道文庫、古文書室、塾史資料室を収容するという案が理事者と四学部長から出され、思わぬ波紋と紛糾を招いた。(注 24)

旧館と比べると新館の設計に対しては要件が増えており、また設計が進む途中でさらに条件を加えるなど明らかに慶應義塾側にこだわりが見られる。

注 21 『日本の近代建築（下）—大正・昭和篇』162 頁

注 22 デ・スタイル以後の機能主義のデザインのことを“モダニズム”と称する。

注 23 槇文彦：モダニズムの思想を受け継いで、洗練されたさわやかな建築空間を創り出し、世界的に高い評価を得ている、日本を代表する建築家の一人。

<http://www.praemiumimperiale.org/laureate/music/item/83-maki>（最終閲覧日：2014/01/12）

注 24 『開館 100 年記念 慶應義塾図書館史稿 1970-2012』 45 頁

新館の建築の意匠に関しては以下のような記述がある。

敷地が比較的狭いため少しでも利用者用の床面積を広げようと、トイレやエレベータ、パイプスペースなどのパブリックスペースを建物中央にまとめた。事務用エレベータを事務室内に取り込む必要があったために三、四階フロアでは中央部分に事務室を配置、書庫部分が事務室を取り囲むドーナツ状になっている。また五階には西校舎にあった図書館・情報学科の教室と図書室が形を変えて移設された。

館内の施設の充実も図った。地下はすべて書庫としながら、閲覧席も配置した。二階にグループ学習室と大学院閲覧室、一階に教員用の特別閲覧室、四階に教員用個室（キュービクル）を作る。（中略）

設計者の楨文彦氏は、大学の思索の場としての図書館がそれにふさわしい外観と内部空間を持つことが必要と考え、大銀杏の広場と塾監局前広場をつなげる、風景を楽しむコリドール（回廊）としての意味合いを持たせ、窓面を大きく開放して、キャンパス風景との行き来を考えた。さらに内外の著名な芸術家の作品を空間の一部として内包することを考えた。（後略）（注 25）

窓面の開放は、旧館と新館の大きな違いである。技術的に図書館でも窓面を開放することができるようになったため、視覚的にキャンパス屋外と図書館の中とを繋げることが可能となった。

また、旧館と比較すると新館は全体的に利用者のエリアを大きく取っており、利用者のエリアに壁があまり設けられていない。（図 1、2）これは、大学図書館の成功事例である国際基督教大学図書館が同じように利用者のエリアに柱を少なくし、全く壁を設けていないのと同通する。（図 3）利用者のエリアを広げるために、トイレやエレベータ、パイプスペースなどのパブリックスペースを建物中央にまとめる、という工夫もこらしている。平面図を見るとこれらは一目瞭然である。

注 25 『開館 100 年記念 慶應義塾図書館史稿 1970-2012』 66, 67 頁

以上の違いは、旧館と新館の利用者に対するサービス意識の違いの表れともいえる。新館では利用者の便利のため開架制を採用することにより、図書館内で利用者が立ち入ることができるスペースを広く取る必要が出たことが建築の平面計画にも違いを及ぼすことになった。旧館に対して地階以外の階層の窓面が大きく開かれている新館は、利用者が立ち入るエリアが建物の外周に沿うようにして存在しているため、利用者は自然光が入る空間で閲覧や会議等の活動を行なうことができる。全体のスペースの中で閲覧室が占める割合が僅かである旧館と比較すると、全体的に新館は図書館の利用の仕方に自由度があるといえる。これは旧館開館から 70 年経過して、利用者にとって図書館が「目的の文献を読む」場所というだけでなく、「目的以外の文献を発見する」、「寛ぎを得る」、「他者との関わりから学ぶ」という場所へとも変化したからではないか。

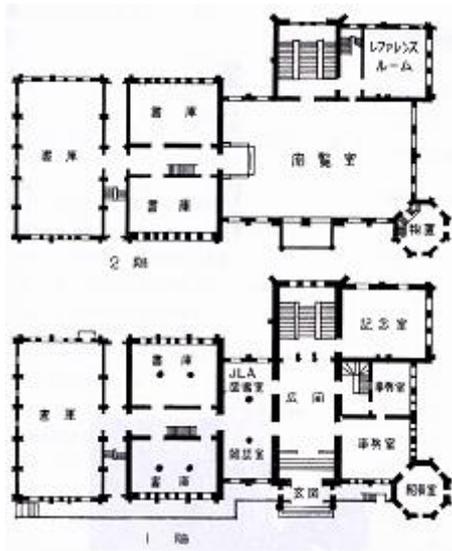


図1 旧館 平面図

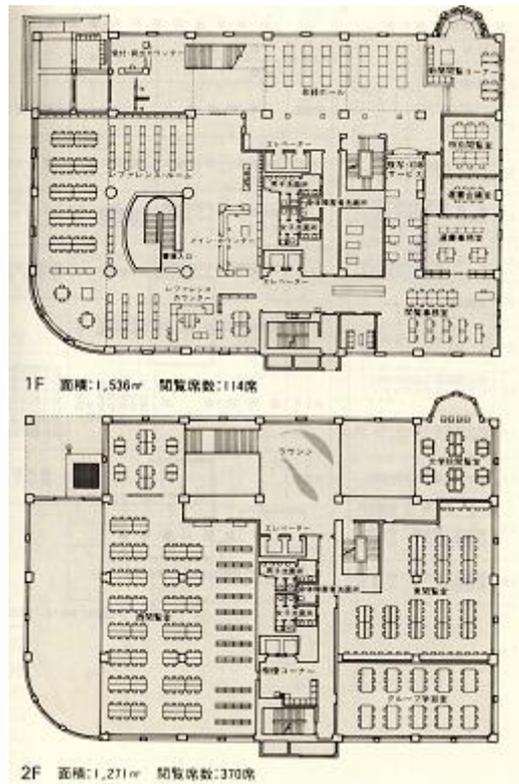


図2 新館 平面図

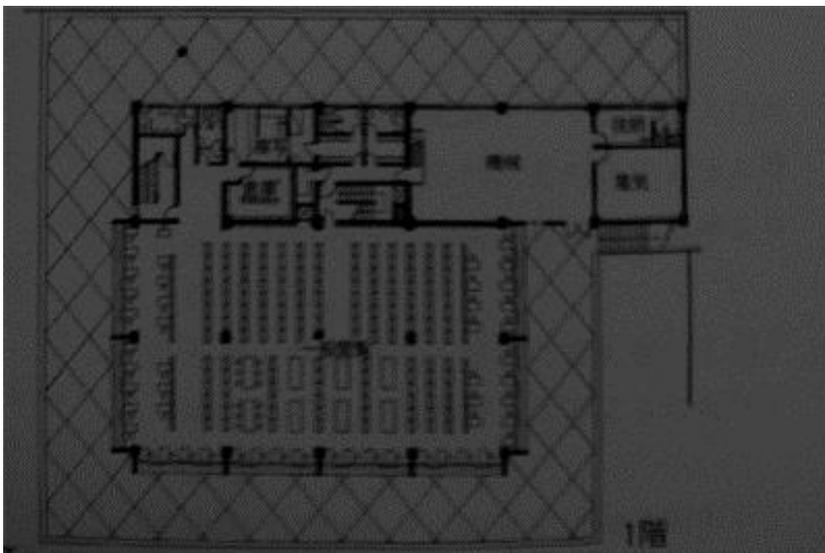


図3 国際基督教大学 図書館

図1 『開館100年記念 慶應義塾図書館史稿 1970-2012』 178頁

図2 『開館100年記念 慶應義塾図書館史稿 1970-2012』 182頁

図3 『図書館建築発展史』 52頁

4. 結論

旧館と新館の建築の違いには確かに学問以外の要素が介入していることが認められた。コンピュータ等機械技術の発展により図書館が大量の蔵書を開架で陳列する必要をなくしたということや、利用者に対するサービス向上のために開架制を導入したことによる、必要とされる利用者スペースが相対的に広がったことなどが挙げられる。

また、新館建築の時代は既に優れた図書館建築がいくつか日本国内にも存在していたために図書館建築のあるべき姿がより鮮明になっていたことから、旧館開館の時代と比較すると塾側にも多くのこだわりを確認できた。旧館開館の時代には様式の決定をはじめとした設計の詳細を全て設計者に任せていたのに対し、新館開館に際しては設計者への塾側の要請が多かったという点からは、70年の月日を経て日本における「学問」の概念がより身近なもの、分かりやすいものとなったことが伺える。

かつて日本における「学問」の源流、「読み、書き、そろばん」に代表されるような、教え手から学習者へと「上から下へ」教える形に近かった「学問」の概念が、新館開館の時代には学習者に選択の自由がある「学問」へと変化していった様が、旧館と新館の建築を比較することで読み取ることができた。この両館における「学問」の概念の変化の表れは、仮説に挙げた「学問の違い以外に建築の違いに与えている要素」、すなわち技術的進歩によっても助けられている部分があることを発見できた。今後ますます技術的進歩により図書館および図書館建築の可能性が広がることが期待できる。具体的には、未来の図書館はより、物質としての本に縛られない建築で作られると考えられる。今後あらゆる本の電子データ化が進むことで、従来のように利用者は本から情報を得る際に「本を書架から取り出す」、「本の頁を捲る」ことを強制されなくなる。情報が「本」というメディアから解放されることで、図書館の書庫機能は必要ではなくなり、主に利用者が情報の閲覧を始めとする「学問」を行なうのに適した環境へと変わるのではないだろうか。

5. 参考文献

・『日本の近代建築（上・下）』

藤森照信著

岩波書店

1993年11月初版

・『開館100年記念 慶應義塾図書館史稿 1970-2012』

編集・執筆：石黒敦子、杉山良子、長野裕恵、原田奈都子、森嶋桃子

執筆協力者：新井圭子、五十嵐由美子、佐藤裕子、谷藤優美子、宮木さえみ

発行人：田村俊作

発行：慶應義塾図書館

制作：株式会社 マイナビサポート

2012年4月

・『慶應義塾図書館史』

伊東弥之助著

編集兼発行人 慶應義塾大学三田情報センター

1972年4月

・『図書館建築発展史』

西川馨著

丸善株式会社出版事業部

2010年11月初版

・『図書館建築―施設と設備―』

植松貞夫、木野修造著

株式会社樹村房

1986年3月初版

・榎 文彦 - 高松宮殿下記念世界文化賞

<http://www.praemiumimperiale.org/laureate/music/item/83-maki>(最終閲覧日：

2014/01/12)

・日本図書館協会 公式ホームページ

(<http://www.jla.or.jp/jla/tabid/221/Default.aspx>) (最終閲覧日:2014/01/18)

• Chicago Public Library 公式ホームページ

(<http://www.chipublib.org/aboutcpl/history/index.php>) (最終閲覧日:2014/01/18)

• The New York Times

(<http://www.nytimes.com/2000/07/16/nyregion/jack-dalton-92-authority-in-library-studies.html>) (最終閲覧日:2014/01/18)

6. 図表リスト

図 1	旧館 平面図	p. 16
図 2	新館 平面図	p. 16
図 3	国際基督教大学 図書館	p. 16